

# 日本倶楽部会報

平成 29 年 1 月 第 11 号

## ～ 日本倶楽部 講演会 ～



平成 28 年 12 月 5 日 (月)  
講師 徳川宗家十八代当主  
徳川 恒孝 氏  
演題 徳川 400 年を考える



徳川宗家当主から直々に徳川時代を振り返って語っていただきました。幕末の動乱期もありましたが、総じて、徳川時代は日本の歴史上平和でもっとも安定した時代ではなかったかと思います。

講師のお話によると、日本は世界の中で極めて恵まれた島国の文明の利点があった。大陸のように通り過ぎる文明ではなく、輸入したものを咀嚼して日本化し、蓄積される文明である。西欧は地域全体を囲む城郭都市に対し、日本は城が離れて建っている。大陸は民衆を含め、皆殺しの戦争であったが、日本の武士の戦争はそうではなかった。

家康公は 6 歳から人質になり、18 歳で独立した。その間少年の目で大人達の世界を見て、人を見る目を育成された。良い人・悪い人・冷たい人。

信長公、秀吉公は大陸制覇を目指したが、家康公は平和な日本の育成を目指した。

平和は人口暴発をもたらし、1600年から1700年にかけて1200万人から3000万人へ人口増加。武士は戦う人から豊かな日本を築く官僚となった。

徳川時代は世界最高の教育システムで子供たちの生き方・教育・女性達の生き方を教えた。武家は 6～7 歳から藩校で文武鍛錬、優秀な人材は江戸留学。農・工・商には全国に 3 万～4 万の寺子屋。ここでは、読み書きばかりでなく、丁稚奉公の教育なども行なった。



戦後教育で「徳川時代は封建制の下で庶民が貧しかった時代」と刷り込まれた世代の小生等は、改めて今日の日本を築いた徳川時代の歴史の重さを感じた次第であります。(T.K.)

